

「生きる」をつなげる

アフリカのHIVとエイズの改善に努めて



■栄養失調センターで栄養失調児のケアをする徳永氏

徳永瑞子氏がアフリカに初めて訪れたのは1971年。日本企業の医療班の一員としてザイル(現・コンゴ民主共和国)に渡り、現地で1年間活動。帰国後に熱帯医学を学び、再びフランスのキリスト教団体を通して同国に赴き、医師のいない診療所で看護師・助産師として医療活動に従事した。このアフリカでの経

験がきっかけとなり「アフリカ病にかかった」と言う徳永氏は、アフリカに住む人々の明るさに魅了され、アフリカの人々との関わりを持つ仕事に携わることとなる。

ザイルから帰国後、日本の医療機関で働いていた徳永氏は1980年代の後半から世界的ニュースとなったアフリカ地域のHIV感染の拡大・

エイズ問題の大きさに胸を痛め、その解決に向けて行動を起こすことを決意。友人などに呼びかけ、1991年NGO「アフリカ友の会」を設立。その後、中央アフリカ共和国の首都バンギでHIV感染予防とエイズ患者支援の活動を開始した。

「アフリカ友の会」は中央アフリカ共和国にある「ブエラブ保健センター」を拠点にHIV感染者の67% (UNAIDS国連合同エイズ計画2008参照)といると言われるサハラ砂漠以南のアフリカ大陸で、一般住民に向けたHIV・エイズについて正しい知識の教育や予防法の指導を主な活動とし、HIV感染者、エイズ患者、エイズ孤児、栄養失調児、生活弱者への診療、生活支援などを続けている。

アフリカのHIV感染者およびエイズ患者は主に生活困窮者であり、食べることもままならない人も多い。そこで、「アフリカ友の会」では現地の農地を借りて食料を生産することで、食料を提供するだけでなく、資金援助を含めた自立支援も行っている。特に自立支援は今後も拡大が必要な活動と考えられている。

1948年福岡県生まれ。1971年にザイル共和国(現・コンゴ民主共和国)に渡り、看護師・助産師として診療所に1年間勤務。1976年に再び同国に渡りフランス・ベルギーの民間団体にて医療活動に従事した。その後、世界的に注目されたアフリカ地域のエイズ問題に胸を痛め、この課題に取り組むことを決意。1991年にアフリカ地域のHIV感染拡大防止およびエイズ患者支援活動を本格的に始めるため、NGO「アフリカ友の会」を設立(2008年からNPO法人)。1993年から中央アフリカ共和国で活動を開始した。現在、アフリカでの活動も行いながら日本で学生や助産師への教育にも携わり、後進の育成に努めている。

とく なが みず こ
徳永 瑞子 Mizuko Tokunaga

特定非営利活動法人アフリカ友の会 代表
NGO Friend of Africa

推薦者

岡本 喜代子 公益社団法人日本助産師会 会長
加藤 尚美 日本赤十字秋田看護大学大学院 教授
南野 知恵子 元参議院議員



■保健指導員とのHIV、エイズの啓発教育の打ち合わせ風景

これらの活動の重要性を認識してもらうために、徳永氏は日本国内の助産師や助産師学生に講義講演活動を実施しており、現在も上智大学の総合人間科学部看護学科国際看護学領域で、「アフリカ文化理解と医療保健活動」という科目で教育に携わり、後進の育成に努めている。「泥沼生活からどうしても抜け出せないにも関わらず、底抜けに明るいアフリカの人々から命の尊さを教えられた」と言う徳永氏は「アフリカの人々は生き上手で、人生の達人」と表現する。その魅力が、アフリカという内戦やさまざまな感染症に侵される危険性の高い地においても、患者さんのそばに寄り添っていることが看護であるという信念を持たせ、徳永氏の活動を単なる支援活動ではなく、「生きる」という意味を探索し人々と共有していく活動として、進み続ける原動力となっているのである。